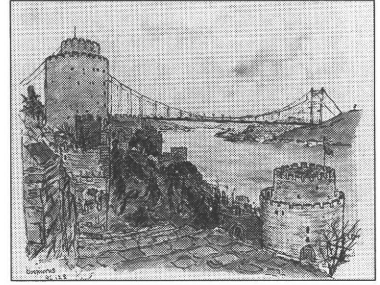


## ESSAY

## 洋の東西—イスタンブール紀行—

森 武生

都立駒込病院外科



ボスフォラス海峡を渡る風は寒く強く、黒い雲の流れとともに、ときに大粒の雨が混じた。どう考えても「すきもの」としかいえないが、12月の海峡を見下ろす城の一番うえの塔で半分からだを吹きさらしの塔の入り口に寄せながら、必死にスケッチブックを抱えて1時間半、胴ぶるえがきて筆が動かなくなるまでがんばった。いくらイスタンブールとはいえ12月であった。

アテネの学会の行き帰りにどこか今まで行ったことのないヨーロッパへ寄りたいと考え懐具合と相談していたら、トルコがあがってきた。トルコ航空のイスタンブール直行便は値段も安いし、だいたい日本からアテネへ入るのにもっとも短い時間ですむことに気がついた。そうだイスタンブール、コンスタンチノーブル、一度は行きたいと思っていて、どうも機会がなさそうだとあきらめていた場所である。

どうしても見たいものは、ボスフォラス海峡とそこを流れる海、オスマントルコから長い間ヨーロッパを守ってきたコンスタンチノーブルの3重の城壁、そしてバザールだった。往きに20時間、帰りに日曜をはさんで48時間の暇ができた。

空港はどこもその国の匂いがするものだが、イスタンブールは羊の脂の匂いがしたように思った。それとも先入観か？ 重苦しい雨だ

った。

入国してタクシー乗り場に向かう途中、例のごとく雲助運転手がまとわりつく。と、正規の乗り場で客待ちをしていた昔のプロレスラー、グレート東郷にそっくりの若い運転手がウォーとわめいて彼らを追っ払ってくれた。これが以後3日間つきあったMr.トーゴー、略してTだった。

よく聞けば若く26歳、悪役的顔の中に幼さがあった。こちらも相当いい加減な英語、彼れはもっといい加減な英語、でも意思の疎通は早かった。私は顔も身なりもよくないし、どう考えても金持ち風には見えないのだが、こういう連中にはもてるようだ。意気投合。城門近くのホテルに送ってもらった後に、夕刻迎えに来てくれることになった。

夜に市内を一回りして、海に近いレストランであまりうまいとは思えない魚料理を一人で食べてホテルへ戻る途中、酒の話を彼とした。ラキというトルコ焼酎こそ天下の美酒であると主張して譲らず、彼の義兄のやっている酒屋へ寄り、ラキを1本買ってプレゼントしてくれた。日本へ帰って是非仲間とやってくれと言われた。どうも同業者風に思われていたようだった。

翌日、また雨のイスタンブールをアテネへ向かう前に土曜日の再会を決めた。洋の東西を問わず、酒飲みは酒飲みを知る。

4日後またまた雨のイスタンブール空港でTと出会った。前はホテルへ急いだが、今回は城壁を見たいという私の希望を覚えていて、崩れかけた旧城壁をぐるりと回ってくれた。たしかに巨大なモニュメントではあるが、文明の末期というのはどうしようもないもので、最後の攻城戦のときにもっとも堅固に見える最後の城壁には配するだけの兵士がいなかったということである。守るほうが8千、攻めるほうは25万だったそうで、しかも補給の途絶えたコンスタンチノーブルは陥落の運命しか残されていなかった。

現在イスラム教はかなり非妥協的な宗教と考えられているようだが、オスマントルコはそうではなく、身代金をあとで回収するために物の略奪はしたものの人間はできるだけ捕虜とするように努めたという。このため兵士のほかに10万人は住んでいたというこの都市の陥落に際しての死者は8千人にすぎなかったという。しかも占領後税金さえ払えばキリスト教の信仰を許可している。

Tはこのような攻防戦にはまったく無関心で、なんでこの東洋の呑んべいはこんな崩れかけた壁に興味があるのだろうかという顔をしていた。

午後はトプカピ宮殿とモスクを回った。サイレンともいえない音が突然鳴り渡り驚いていたら、夕方のイスラムのお祈りの時間で市内に無数にあるモスクから、拡声器でイスラムの御詠歌が一斉に始まった。この声の調子が何かに似ていると思い出してみたら、東京の石焼きいも屋の調子によく似ていた。街じゅう、突然に石焼きいも屋でいっぱいになったようで面白かったが、このことをTに言ったら理解したのかどうか、敬虔なイスラム教徒は露骨にいやな顔をした。

名にしおうトルコ料理を食べたいがどこか知らないかと聞くと、トルコ料理のうちの何

を食べたいかと聞き返され、それとも例のベリーダンスでも見ながら食べるころがいいかねと言われた。歯が痛かったこともあり、とにかく観光名所は願い下げで、トルコスープが食べたいと答えた。

しばし考えた後、それなら家へ来い、おふくろはスープづくりの名手だという。しかし、まだ初対面みたいなものだし、金を払わねばならないのかな、などと迷っているうちにさっさと電話して決めてしまった。おまえは友達だ、わが家へ友達を招待することは親父もおふくろも喜んでいて目を輝かせて告げる。

ままよ、よし行こう。そーっと、「費用は？」と聞いたら、「おまえは友達だ」とじろっと見られた。しかし、洋の東西を問わず、呼ばれたら手みやげくらい持っていかなければと思ったが、まわりに花屋もないし、何もない。

そこで彼が迎えに来る間にホテルの自分の部屋に戻って、昔ウィーンで描いた絵を必死に思い出しながら1枚完成させた。手づくりの額縁に収めておみやげとする。

日本的広さの3DKにスープの匂いと家族が待っていた。ただし、非常に遺憾なことにこの日は回教徒は酒を飲んではいけない日だった。うぬ！ 行儀よく話をし、スープとご飯を食べた。いい両親だった。私の絵は応接間の一番正面に据えられてうれしそうだった。

翌日はボスフォラス海峡の奥へ行った。東ローマ帝国とコンスタンチノーブルの死命を制した3カ月でできた、海峡を制圧したルメリ・ヒサル城へ急ぐ。実に堅固な城で、昔の威厳を今に保持し、海峡のもっとも狭いところを睥睨している。どうしても描きたくなくてTに2時間あの塔の上で描くからと言ったら、心底おかしな奴で、「ごくろーさん」という顔をした。

急な階段を登ると吹きさらしで、冒頭に述べた状態となった。でも向かいにはアジア、

ここはヨーロッパと思って、間の冷たい海峡を眺めていると、何かしらの感慨を覚えた。歴史上いくつもの民族がここを西から東へ、東から西へと越えていった。そしてまた文化も、学問も……。

今われわれが奉じている近代医学などというものは、たかだか500年、その前にイスラムの高いレベルの医学や古代ギリシャの実に理性的な医学と思索がここを越えていったのであろう。長い歴史の流れの実感の中で、自分の小ささと自分を規定している考えの浅さを感じる。学問が規矩にとらわれたら進歩がなくなることを切実に思わなければ……などと妙に高揚した思いで描いていたなら、風にからだ揺らぎ、水入れと予備の筆がはるか塔の下へ吹き飛ばされていった。かくしてでき上がったものが本誌表紙の絵である（表紙参照）。

夜、Tと下町のレストランでラキを飲みかつ語らう。ジプシーの音楽に誘われて、店の客たちが踊り歌う。どの曲でも何となく同じ

ように踊るのでよく観察すれば、何とまさに阿波踊りにそっくりだった。特に手の動きはそのままだった。阿波踊りトルコ由来説に酔っている間に、次第に意識不明、あとは“もうろう”……。

ラキはうまいが怖い酒ではあった。翌日Tいわく、「俺も今までで一番たくさん飲んで酔ったが、おまえは強い！」ということだった。でも考えてみればその彼にホテルまで運転してもらったはず。おお怖い。どこへ行っても生態に進化がなく同じなのは、死ぬまで治りそうにない。でも東洋と西洋の境に身を置き、得たものの多い旅であった。

翌日空港で別れるとき、たしかにTの目は潤んでいた。そのあと午前中の買い物のおつりを渡すのを忘れていたと言って300円足らずの金を空港の中まで走って渡しに来たのは、洋の東西を問わない信義に厚い男の目であった。